
犬と名探偵が食堂はラブソディー

高野豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬と名探偵が食堂はラブソデー

【Nコード】

N5958J

【作者名】

高野豆腐

【あらすじ】

天霧学園高等部1年G組

出席番号三番が学食のラブソデー

食堂にて頻発する唐揚げ定食紛失事件に挑む！

みたいな感じでやります

非公式探偵部活動日誌要提出

朝、違和感で目が覚めた

流れ落ちた汗のせいでタオルケットが全裸の肌に貼り付きとても気持ち悪い

正にこれが最悪の1日の始まり方だった

いつまでも汗まみれというのも気持ち悪いのでとりあえずシャワーを浴びる

ただいま時刻6時28分

登校時間は8時25分まで

なかなか良いタイム！

ゆっくり浴びても確実に間に合う時間だろう

そして入ったシャワーにて

不幸その1

ボディーソープ品切れ中&垢擦り紛失

……このベタベタする体をどうやって洗えと…水か？水なのか！？

お湯もありか？

だめだこいつも

私立天霧学園

何でもかんでも世界一を誇る我らが大日本帝国においてさえ一番頭の
の良い金持ち学校

あと敷地が妙にでかい

そして結構な学費が全て免除 + α とかで特待生の待遇が良いのでも
有名だ

そんな学校の通学路は当たり前とでも言うかのように長い。やたら
長い

しかしまあ、春の陽射しが心地好いからとりあえずはよしとしよう

そんなこんなでボーツと歩いていると肩に軽い衝撃が
とりあえず振り向く

あらいい笑顔

「おっすつつきー、相変わらず美人さんだー！」

相変わらずもなにも昨日とは変わらんだろそりゃ

「やめたまえ泉ちゃん。照れるから照れるから」

声をかけて来た Nice な少年ボーイは泉水泉水

美少女みたいな顔の少年

しかし学年ブービーという残念な頭の持ち主

手抜きにしか思えないような名前だけどそうでもないらしい

下の名前はいずみじゃなくて「せんすい」

なんて漢らしく和の雰囲気をもし出しているんだろつか……「そ
ういえばつつきーさ、紫陽花と一君見なかった？」

「見てないなあ、まだ来てないんじゃないかな？」

一君と紫陽花というのはいつもつるんでいるバカ野郎達の名前だ

いち君は――

いちいちで

いちもんじはじめ

こいつも手抜きにしか思えない。でも違うらしい

紫陽花は向日葵紫陽花

ごつい漢字で

ひまわりあじさい

女の子みたい

二人ともバカ

紫陽花は主席なのにバカ。どうしようも無いな、あいつ

いち君はバカ。本格的にバカ

泉ちゃんと一位差で学年ワースト。御陀仏！

「そつか：あの2人がまたなんかやらかすみたいたからさ」

バカ2人はこの天霧学園高等部ではいたずらっ子で有名なのだ

いたずらじゃすまないこともやってるけどご子息ご令嬢は気にしな

いみたいだ

さすが金持ちは格が違った

「なるほど今度は止めようとして「こないだははぶられたけど今度

こそまざりたいんだ！」

だめだこいつも

「でも部長怒るんじゃない？停学になりかねないしさ」

因みに今は7月だから入学3ヶ月目だ

それなのにバカ2人は停学ギリギリ。どういふことなの……

「どうせまた紫陽花が「副部長権限だ！」とかいって無理やり実行

しちゃうよ」

呆れ顔になる泉ちゃん

さすがにアホすぎるからだろうか

「まあバカ2人はほつといて教室行こうよ。次体育だからプールじゃない？」

「そうだったけ？まあ急ごうか」

言って歩き出す

バカ共の計画は心配だけどたいした事もなく今日も終わるだろう
まあ1日張り切っていきましようかね

お前が一番かっこいい

「あさ君、今何時？」

暗くて良くわからないが隣にいるはずの二三四さんが声をかけてくる
二三四さんというのは俺の友達で親友と言ってもきつと過言ではな
いはず

一二三四

いちにさんよん

で

にのまえふみや

なんだか数字ばかりで男らしい名前だけでも彼は女性です。男の
俺よりモテるとかやめて……

「七時五十分ちょーど。まだ時間はあるよ」

「ほーむるーむまでにこの作業を終わらせないと怪しまれるよ？」

「のーもんだいだよ二三四さん。部長と副部長がやってるんだ、時
間なんて気にすることはないさ」

なんて爽やかな俺！かなりキテるぜ俺！

「気にした方が良いと思うけど……。そういえば一君はどこ行ったの
？さっきまでいたのに……」あんな馬鹿にまで気を使う二三四さん素
敵！

「暗すぎてわからないけど多分その辺にいるよ。それより早く見つ
けないと憑彦はともかく勝浦に殺されてしまう……」

「いやいや、いくら勝浦でも」忘れた時計を取りに女子更衣室に来
た」くらいじゃ怒らないよ」

無い無い。なんて笑いながら言う二三四さん

いや……あいつは確実に行動に移してくる、こないだスカートめくつ
たら躊躇せずにハートブレイクショットを放った女だよ奴は！

「女子更衣室って時点でアウトだと思っただ、俺は！」

大体時計だつて

実は昨日着替え覗きに來た時に落としました
なんて言ったらいくら天然の二三四さんでも俺に霸王翔吼拳を使わ
ざるを得ないだろう

だがしかし昨日の覗きの主犯である一君がいないのはなにか理由が
あるんだろうか……謎だ。まさかあいつ……カメラか！？

手伝いに來たんじゃなくて昨日仕掛けたのを取りに來たのか……！？
着替えの盗撮とか……

最低だな……あいつ……

一枚五百円までならだせるな

「あさくん、どうかな？時計あつた？」

「いや、なかなか見つからない、泉水め……よくもこんなところに投げ
やがったな……」

「ほんとにね。いくら友達でもやっていいいたずらとだめないたず
らがあるよ！」許せ泉水。お前は時代の犠牲になつたのだよ、犠牲
の……犠牲にな……

今度何かお菓子買つてやるからゆるして。

「しかし無いな。仕方ない……時間もあまり無いし引き上げるかー」

「平気なの？結構時間かけたし大事な時計とかだつたりするんじゃない？」

相変わらず鋭いところをつく娘っ子だねしかし

「別にいいよ、父さんの形見つてだけのお古の安物だから」

実際無くなつてほつとしてたりする位だ

腕につけてるだけであの日から一度も時を刻まない時計

目を向ける事さえ怖くてできずにこの十一年右腕についてるだけなのだから

まあ、

あの日についてはいつかきつといつか話す時もあるかも

「ええっ！？形見なら尚更探さないとだめだよ！着替え中とかにも探してみるよ？きつと見つけるからね！」

なんて健気なんだ…！

もしスク水で時計をさがしてる姿が見れるなら別に一生見つからなくてもいいしカメラを仕掛けた最低なあいつに感謝してもいい「おいあつくん！時計あったぜ！」やっぱ死ねばいいよ

あの野郎…さすがワーストだな！空気が読めない！馬鹿めが！

「よかったねあさくん。見つからなかったら大変だったよ」薄い胸をホツと撫で下ろす二三四さん
かなり可愛い

この胸のたかなりは恋だろうか

それとも後ろから襲いかかる殺気のせいだろうか

恋としての身震いか

近づく死の匂いにたいする戦慄か

どちらにせよ後ろにいる帝国領土千葉区域某所は語るのだ

「で？ホームルームにはいないしその上女子更衣室だし一君は怪しい動きしてたけどお、あつくん君。君は「何」をしてるのかな？」
あらあら可愛い声♪

死刑宣告か！

いつの間にか殺られていた1+1=2は意識を手放してはいるようだがなぜかカメラは離さない

漢の中の漢だよお前は！

後で中身を売ってくれ！

親友がそこまでやったなら俺も男を魅せるべきなのだが腹に決まったナイスなブローが肝臓に食い込んで呼吸があぶないいいししかしダンディーに返すのが紳士！俺は紳士！行ける！

「そんな事より速く着替えないと授業に遅れてしまっぞ？さあ此処で着替えぶっ…！？」

か、会話の途中でアッパークット

舌が消し飛ぶかと思った…

というか意識はとぶぞこりや。

グッバイ意識また会おう！

そんなダンディズム溢れる俺が最後に見たのは俺を庇おうと前に出る二三四さんだった

この広いかも知れない世界の中でもお前が一番かっこいいぜ

紹介が遅れたがダンディーな俺は

向日葵紫陽花

因みに「あさくん」ってのは

あじさい

の「あさ」らしいよ！

可愛いセンスだ…

お前のババアは頭がおかしい

頭が割れるかとおもった…

確かに女子更衣室に入ったのは悪かった。うん、それは認めよう。
俺は紳士だからな

しかしでかい問題は残った訳である

「あさ君…君は嘘、ついてたんだね…？」

ああ、そんな悲しげな顔しないでくれ…

確かに俺も悪かったけども「時計？投げて無いよ。大方覗きにでも
行って落としたんだよ」なんて呆れ顔で語る泉水

連れていかなかったってだけでここまでする必要はないだろう

奴のカミングアウトで我がブラザーは千葉区域某地区の手によって
カメラと共にプールに沈められ、かくいう俺は愛する人から良心が
痛むような質問攻めにあっているのだ

炎天下のプールサイドに正座は厳しい。冬場も使える様に温水で、
屋根が開閉式の金持ち設計なのだ

しかし今は夏の日射しを受け、逞しく育つべし！という漢らしい教
訓に従い屋根が開け放たれ、直射日光ビンビンである

あつぢいいい…

いくら愛が有ろうとも話しは耳に入らんよ…

仕方ない、漢らしく簡潔にすませよう。頑張れ俺！

「すまない、二三四さん…。過程はどうあれ結果的に俺と一がやつ
たのは紛れもなく覗きだ。言い訳はしない。好きにしてくれて構わ
ないさ」

「過程だの言い訳はしないだの…漢らしく聞こえるけど実際はただ
の変態だよー。」

黙れ泉水

「全くその通りだね。ひー君もこれに懲りたら変な事しちゃだめだ
よ？」

「あさ君…？そんなに水着姿見たかったの？」

「そんなバカな！俺が二三四さん以外の水着に興味あるわけないだろ！？」

「あつ、あさ君…！照れちゃうよう…」

頬を染める二三四さん。ヤバイ…マヂで可愛い！いつか結婚する！

「ああ…二三四さんが簡単に懐柔されてしまった…」

因みに説教組は優雅にパラソルの下だ。ちくしょう！

あと関係無い気もするけども紹介しよう
なんだか大人っぽくしゃべっているのは

狗神 憑彦

おどろおどろしいこの名前はそのまま

いぬがみ つきひこ

名付け親はおばあちゃんらしい

憑彦には悪いが言いたい事がある。

お前の ババアは 頭がおかしい！！

千葉が嫌いな訳じゃない

―二時限目・プール―

何か間違ってる気がする

そう、確実に何か間違ってる！

何故俺は制服でプールを泳いでるんだ？Why？

「ほらほら。あっ君ペースおちてるぞー」

「うつせえ千葉野郎！そもそも何故、制服で、泳がなきゃ、いけないんだ、よ！」

千葉野郎に不平を言ってるのは俺ことナイスガイ紫陽花だ

ちなみにただいまマヂでプールを制服で十往復の最中だ。息切れしてるのは勘弁してもらいたい

「しかし本気で何故、俺は泳いでるんだ？」

「それは覗きをしたからじゃないか？」

まるで第三者のように話しかけてくるのは一野郎だ

おかしい…何故こいつは制服を脱いでるんだ…？何故ビート板なんだ…

「うつせえバカ！共犯のくせになにビート板使ってたくそ！あと、さりげなく制服脱ぐなよ！せこいぞー！」

「だって俺カナヅチだし。だって泳ぎにくいし」

なんて卑怯なんだ…

許せん。いつか倒す…

てか禿げるよ…

「しかし、あれだ。何故教師は注意しないんだ？少なくとも俺は制

服だぜ？」

しかも周りの奴らすらどっかいつてるし

「H A H A H A、紫陽花はホントに馬鹿だな！」

「あ、靴下に水入った……」

「えっ、ちよつと!？」

「てか今日は学食なんにしようかな……」

「無視はよくないぞ！いじめの前兆かつ!？」

「そうだ！今日は唐揚げ定食にしよう！」

「スルーやめて！寂しいから！ーは寂しいと死んじゃうんだよ！」

「それは珍しいな！最近はウサギすらお留守番できるんだけだな！」

「俺を小動物と一緒にすんな！」

「じゃあうなぎか！」

「意味がわからないよ！」

「似てるだろ！字が！」

「だからなんだよ！」

この野郎……！自分の非(?)を認め無い気かよ……！

「へーい！元気かーあ?……って!?!2人ともいつまでプール入ってるのさ?」

いきなり語りかけてくるうなぎの可愛い泉水

あれ、なんか違うよな？

まあいいや。

「いつまでって……。まだ八往復しかしてないし」

「おまつ!?!何サバ読んでんの!?!俺は八往復したけどお前は三往復の間違いだろ！」

「いやー。それはどうでもいいんだけどさー」

「うん?じゃあなに?」

「それがさー。聞いてよー」

「うん。聞くから始めるよ」

「じゃあ心して聞くように!」

回りくどい奴だ

まあ俺は疲れるから乗らないけどね…

「「どんとこい！」」

「いやー、ノリのいい親友がいて僕は嬉しいよ！」

「そうか！なら早く話してくれ！」

「うむ。簡潔に言つとだね」

「うん」

「勝浦が」

「うん」

「2人の事を、」

「早くしろよ！遅いよ！ゆつくりだよ！？」

「まあ簡単に言つと、勝浦が今回は見逃すから風邪引かないうちに上がつて来たら？つて」

確かに解りやすい事この上無いけどさ

「最初から言つてれば二十秒で終わつたじゃん…」

「いやいやいや、焦らしてからこそ有り難みが増すんじゃないかな？」

「つて？」

「勝浦が」

超スマイルな泉水

いや、それ以前に勝浦に対しての考えを改めて無いと行けないだろう…

あいつは千葉野郎じゃない

「天使じゃ…いや救世主じゃ…」

「ケーン…」相も変わらずーは良くわからない事を言つ奴だよ全く…

まあしかしあれだ、うん。

僕は別に千葉が嫌いな訳じゃないんだ

もちろん勝浦の事だけでも

実は親子丼

学園において一番生徒が集う場所である食堂

そこで働く俺の朝は早い

朝は5時前から昼間の仕込み、金持ちの趣味に合わせて手間隙かかるスープだのを作るのだ

しかも味付けに失敗したら即首が飛ぶ

その上 超混む

正直これで給料が50万切ってたら割りに合わないだろう

こちらら一応地元到店を持てるはずだったんだからな

引き抜かれたんだよ！

問題は起こしてないよ！

料理人の夢を蹴ってまで入ったんだよ！

うん、現実逃避しても無駄だろう…

唐揚げに使う鶏肉が無くなった。

実は親子丼もなんだ…

料理人日誌より抜粋。いや、嘘です

突然だが俺の故郷の話がしたい。自己紹介っている？無くても俺の事なら全部わかるよ！

…なんて、さすがに無茶か。反省、てへっ
では早速。

俺のフルネームは、

勢鞍暁ノ守友九クラムベリー

別に詐称じゃない。親父と爺が頭沸いてて母親が外海出身なんだ。
ちなみに読み方な。

せくら

あきのかみ

ともひさ

くらむベリー

な。

区切りはわかるだろうけど一応。

勢鞍・暁の守・友九・クラムベリー

覚えとけ！いえ、覚えてね？覚えて欲しいです…

それでなんだったっけ…

そうそう！俺の故郷の話だ。

俺の故郷は大日本帝国長野区域の外れにある第42地区都ヶ島って
いうなんか漢字のたくさんある島なんだ。

たしかに母親は外海出身だけど俺はれっきとした帝国民のつもりさ。
んでだな、そんな俺の故郷である都ヶ島は総人口500人未満の極
小さな島だ。

島の外周はたしか3？あるかどうかだったかな、多分。でもそんな
島にももちろん学校はある。

小学校から高校まで全部分校だけど。ちなみに俺もそこ出身なんだ。んで都ヶ島の特徴なんだけど、海が綺麗なんだ。beautifulなんだ。

ちなみに名産は鶏肉な。

そう俺の首がかかっている例のお肉様の出身地さ。

いやーまじでぴんちだわ俺。

いやいやいや、また脱線したな。

都ヶ島の魅力の話だっけ？

あと野菜も結構いけるぜ。

あとみんなが優しいな。これは田舎ならではの感じでもあるかな。でもそんな魅力あふれる島だけど観光客は少ないんだよねー？逆になぞだわ。たしかに娯楽は少ないけどさ、来たら絶対楽しいって。俺が案内してやるぜ？ん？なんだ、自分で回りたい派なのか。なら仕方無いかなー？うん。

まあ、それでさ。

俺は料理人になって夢を叶えるために帝都にでてきたんだ。

本当はさ、別に親父のあとついで漁師でも良かったし、爺の真似して野菜作っても良かったんだけどさ。

それでもやっぱり料理人になりたかったんだな俺は。結局島をでて帝都に来たんだし。

もしかしたら島の中で自分だけが特別になりたいだけの願望なんじや無いかって出てきたばっかりの時は良く後悔してたよ。

でもさ、結局、今、こうしてプロとして雇って貰えてるんだ。応援してくれた島民達や厳しくても優しくかった師匠とか兄弟子とかに感謝してるよ。

もちろん給料もらってる身分だから雇用主の学園長とか学生のあんな達にも感謝してるさ。

……………ん？

ああ、ごめんごめん。感慨に浸ってたから話聞いてなかったわ。
で？なんだつけ？

ん？ああ、俺の夢か？

なんか年下に話すのも気恥ずかしいものがあるな、しかし。

うはっはっは、気にしないで話たまえ。ってまるであんたのが年上
みたいだな！ふっくく。

笑いが止まらねえよ！

いや、別にそこまででも無いかも…。

まあいいか。

じゃあ俺の夢についてもう少しだけ語らせて貰うぜ。

って、おっと。あんた授業でなくて良いのかよ？

天才だから関係無い、ってまたでかく出たな！

さすがに主席は小さい事は気にしない大物なんだな…

参考にさせて貰うわ。

そんでさ、俺の夢だけどさ。

俺はさ、島に自分の店を建てたいんだ。

いやな？只の定食屋ならすぐに出せるぜ？

でもそれじゃダメなんだ。

島にはお世辞にも何でも有るわけじゃない。

俺みたいに飛び出してく奴だって沢山いるんだ。

そしたら後に残るのは年寄りばかりになっちまう。

だから俺はさ、

都ヶ島には「勢鞍暁ノ守友九クラムベリー」の店がある」だけで人が
来るような男に成りたかったんだ。成りたがったんだ。

観光客が沢山来ればもしかしたら、島の事を誇りに思って、島に残
って、これからの島を盛り上げてくれる人間が出るかも知れないだ
ろ？

そしたら島民はみんな幸せになれる気がしてたんだ…。
自意識過剰つつたらそうかも知れない。身の程を知れ、って言われ

たらその通りさ。只の夢物語なんて言われたら否定の言葉なんて出せないさ。

でも、それでもさ、俺はさ、そんな夢を捨てきれなかったんだよ。10の時から抱えてた願いなんだ。捨て方なんて解らないんだ。

だから、帝都に出た。

修行して、凄くなつて、島に帰るために。

そしたらさ、師匠なんかは才能が有るつてさ、兄弟子達は悔しいけど跡継ぎはお前だな、とかさ。

うれしかったなあ……。師匠に呼び出されて「お前はもう一人前だ。島にうちの看板で店出して欲しい位だ。孫娘の旦那に俺はきてほしい。お前になら、俺の総てを任せられる。」なんて言われた時は1晩中泣いたよ。

なじられて、殴られて、怒られて、厳しくされた。でもそれもあの人なりの愛情表現なんだなつてさ。何度も帰りたくなつた。でも、それでも諦めないで、夢を捨てないで良かったつて本気で思った。それでさ、師匠に言われた通り島に師匠の店の名前で料理屋出すつもりだったところにここからオフアーが来たんだ。

いきなり学園長が訪ねてきてさ、「私は貴方の料理が大好きだから、私の子供達でもある生徒達にも貴方の料理が食べさせたい。」とか何とか言われてさ。

最初はまさにポカーンだよ。びっくりした。

1晩考えさせて欲しいつてお願いして考えに考えたんだ。

ここで学食を作ればさ、勉強になるし何より沢山の料理に触れられる。もしかしたら知名度も箔も付くかもしれないつて思ったから来たんだ。

あと、誰かが俺を必要としてくれるのが嬉しかった。それが一番の理由かも知れない。

そんなこんなでこの学校で3年働いて来たからさ、雑誌に紹介されたこともあるんだぜ？

だからそろそろ島に帰って、夢を、俺のたった1個の夢を叶える時

だと思っただ。

そしたらさ、今回のあれだよ。

そう、鶏肉紛失。

この学校のお偉いさんは責任にうるさいし、食堂を管理してるおっさんは俺が若いから気に食わないらしいしさ。

今回ばかりはどうにもならないかな。

間違いなく首。しかもこの学校は世界から注目されてるんだ、たかが鶏肉無くしただけでも俺の評判は消えて無くなるよ。

そしたら夢は叶わないんだ。

どんなに望んでもダメさ。

……っ！はあ……。

俺の17年抱えて11年間死に物狂いで成熟のために努力した夢も終わりだな。

でもさ、首になって島に帰ったら親父と一緒に漁師やろうと思ってるんだ。

たしかに悔しいさ、犯人捕まえてぼこぼこにしてやりたいさ。

でも、こんなこともあるさ。諦めきれなかったら帝都で居酒屋でも営むから、18になって成人したら飲みに来いよな。

じゃあな、長々と愚痴ってごめんな？27のお・に・い・さ・んの愚痴なんてつまらないだろ？

まあ今日はまだ居るからさ、食べにきてほしいかな。お姉ちゃん美人だからプリン位ならサービスするぜ！

ああ、じゃあな。

いくら天才でもちゃんと授業でろよ？

うん、わかったならよろしい！

学業に励めよ学生！

じゃな、月見里

草木溢れる荒野で（前書き）

いつもよりグダグダです！

覚悟してから読んでね？

T o B e C o n t i n u e d ?

草木溢れる荒野で

——ふう。

世紀末に入って早二年。今まで生き抜いた事が奇跡の様な時代に、俺は一人で物思いに耽っていた
そう、これから行われる死闘についてだ

俺は自他共に認める程に大胆な性格だが、さすがに死闘の前ともなれば緊張だつてするつてもんだ
この草木溢れる荒野での死闘は奴の決めた場所だ。だがそれはどうでもいい……

今重要なのは親友であるあいつに、親友であつたあいつに俺が本気で拳を震えるかどうかだ。

約束の時間まではあと少し

腹を決める紫陽花！俺ならできるはずだ。こんな時代とはいえ、親友の泉水・憑彦をてにかけ、勝浦に二度と元には戻らない痛手を与え、

あまつさえ、俺の愛する二三四さんに自害を強要させる様な仕打ちをした。

あの外道、

——

をこの世から消し去る事位。

—— さあ、時間だ。深呼吸して息を整える。大丈夫、できるさ。

俺にはあいつらがついてるんだ！

さあ、ゴングはならされた！

あの外道を自らの手で叩きのめす！

行くぜえええええ！！

「よお……久しぶりだな、あじさああい！楽しみにしてたぜ！お前に俺の奥義を叩き込めるこのと

「先手必勝！ぬりややあ！」

台詞を言い終わる前に叩く！これぞ王者の道！つまり王道！

「ちよつ！汚なっ……」

「お前と喋る事等何も無い。答えは拳に宿る！」

「いや、せめて話位しないと、おまつ、俺が行動した理由とか聞かないでいいのか！？」

何を言つとるんだこいつは

「理由等要らない……最後に立っていたものが勝者！すなわち正義！」

「くっ！一撃が、重い！避けるしか無いっ！」

すかさず距離を取る――

それに応じてこちらも少し離れ自分の間合いを確認する。

「力こそ正義！良い時代になったものだ！」

負ける気がしない

俺は波に乗っている

階段でいえば俺は上！奴は下なのだ！

「お前、発想と台詞がどう考えても悪役か強敵と書いてともだぞ！？」

……なんか喚いてるな……

まあ何だつて良い。俺の目的は奴を倒し、この荒廃した大地に再び息を吹き返す事だけだ。あと復讐

「何を企んでいるのか知らないが……何を言っても無駄だぜ？今の俺は！誰にも！そう誰にも！遅れを取る事は無い！言わば総ての生物をぶつちぎりで超越したのだ！」

「お前は船から発見された仮面でも被ったのか！？」

みんなの思いを込め、拳を握り締める。次で、仕留める！

「見せて殺るよ、はじめええええ！俺の！奥義つてヤツおお！」

「ふう……。来いよ。俺はそれを受けた上でお前を倒す！この胸に

宿る願いの為に！」

「ふん、戯言を。俺の技を知っているものは誰一人として居ない。何故かわかるか？それはまさに見た者は死ぬ。真実の必殺だからだ！」

誰かに師事することも出来ず迷った世紀末！奪った物は数知れず、そして世紀末が俺に与えたのは殺戮の為の技のみ。しかし、それでも！この俺の技に引導を渡すときが来た。

「一。お前の死と言う大きな花を咲かせこの技を封印する。勝っても負けても、これが最期だ！かかって来い！我が道の前に障害など無い。と体に刻みこんで果てる！」

長、台詞は、息がき、れるう…

多少離れた位置にいても一の呼吸音が聞こえる。しかしそれは俺も同じだろう。

これが最期の時、我が道の終点。即ち玉座に座る時だ！

「やるしか…無いな。紫陽花！お前と俺の前にある願いは同じはずだ。それでも道を違えた！お前は！俺が…」

台詞の途中で息を整えるアイツ

そして、言い放つ。

「この手で葬ってやる！」

……あれ？

なんかちがくね？

アイツ悪者だよな？配役変わってない？気のせい？

…まあ、いいか。

「もう言葉は要らないな…」

「ああ、後は拳が答えを出してくれる」

互いに一拍間を作る

そして、同時に魂を込め叫ぶ

「行くぜ！おい！！」

二人同時に駆け出す

先に当てれば俺の勝ち

情報はそれだけでいい
見えるのは俺の望んだ平穏だけ
此处で果てる訳にはいかない
そして互いに互いの射程距離に入る
互いの身体が交差し、魂がぶつかり、そしてすれ違う

……入った！

俺の勝ちだ

俺の勝ちだ！

俺は勝ったんだ！

「ふん、ジャリボーイが……」

ドサリ

と

一の身体が荒野に倒れる

長かったこの抗争は終わった

俺の望んだ形で

切なくなんて無い

泣きそうになんてならない

涙は、枯れ果てたから。

「ばっか、やろうが……」

くそつたれ

最後に本当の最後にこんな置き土産しやがって……

涙が止まらない

枯れ果てた涙が目から零れ落ち続ける

そうだ、これもすべてアイツのせいだ

後頭部に感じる尖った鈍器の仕業……だ？

いや、何？What?まじで痛い。かなり痛い。すごい痛い。

そして追い討ちをかける様に第二謝があああああ！

死ぬ！マヂで死ぬ！痛い痛い！

……うぺ

―四時限目 世界史―

「……………うぺ」

世界史の担当教員であり我が1学年G組の担任である

宮永 真琴

みやなが まこと

通称まこっちゃん

なかなか体格の良い25歳独身である

別に麻雀がプロいわけじゃないぞ！

とにかくそれが出席簿の角で、眠りに落ちた向日葵紫陽花の後頭部
んを強打し

そのあとリズムカルに連打しはじめたとき奇妙な声があがった

そう、例の

「うぺ」

である

我が友人ながらなんとも情けないうめき声だなあ…なんて少し浸っ
てみる

しかし、ほんとに情けないな…

なんだあれ…

どすどすどす

「うぺぺぺぺ」

……なんだあれ？いや、マジで、何？てかあの2人は教室で何して
るんだ…？

まこっちゃんは授業せずにＹＯＹＯ言いながら紫陽花叩いてるし
「憑きちゃん、憑きちゃん」

「なんだい浦ちゃん？」

隣の席に座る勝浦が声をかけてくる

しかしここは大人な反応

本気でびつくりしたのは秘密だ」

「そろそろさ、まこっちゃん止めない？」

「ん？どうかしたの？」

授業やりたいから、なんて理由は勝浦には無いだろうし…

なんかあつたのかな？

「いやーさ、さっきからあつくんが殴られる度にふみちゃんがチラチラ気にしてるんだよね…」

なるほどなるほど

そーゆう事ね…

仕方ないなー

「はいはい、なんとかしてみるよ」

「やったー。たーのんだーよう」

やる気無い娘だなあー

しっかたない

やりますか

いよっし！

「紫陽花、紫陽花。大変だよ！二三四さんがいきなりぬぎでした！」
結構大きな声でパチこいてみる

「えええ！？つ、憑きちゃん！？な、何言ってるのおお！？」

「…うえ？ま、まじで！？か、カメラカメラ！」

なんかわからんけどネタにされた可愛い娘があわてて

寝てたバカが飛び起きる

しかし別に気にしない

「紫陽花！早く起きないと二三四さんが服着ちゃうぞ！」
だめ押しにもう一声

これでいける！

あとまこっちゃんよ、そのＹＯＹＯ言うのをやめなさい！

「ぐ、ぐえ。……っは！目覚めた！起きた！しかし愛しのあの娘は脱いで無い！あと担任！頭ぁ叩くな！脳細胞死ぬわ！」

「じゃあ寝んな！俺の世界史はそんなに暇かおらぁ！」

紫陽花に有無を言わさず出席簿で殴るまこっちゃん

「や、やめろ馬鹿！痛い！」

「あ、あさくうん…こ、こんな場所で「愛しの！」なんてはずかしいよう…」

「だ、誰だ嘘ついたのは！脱いで無いじゃん！俺の安眠邪魔しやがつて！」

理不尽に怒る一君

いやいやいや、寝んなよ

「…つてか寝んなよ！」

寝てた首席と担任にダブルで攻撃される彼

一人殴る権利無いじゃん…

「紫陽花！お・ま・えもだボケい！」

「いたつ、痛いよまこっちゃん！」

なんだかギャーギャーしてるなー

いつもよりグダグダしとるね。

空気を帰る為に浦ちゃんに質問してみる

「ねえねえ浦ちゃん？さっきの休み時間どこ行ってたの？」

「ん？秘密だーわ。」

「じゃ、仕方無いな。あー今日はお弁当無いし、学食行くな。」

「ちよっ！もう少し絡んでよ！寂しい！」

いやー教室がうるさい！

から？浦ちゃんを紹介しよう！

心して聞くのだ！

月見里 勝浦

やまなし かつうら

名字みたいな名前の女の子である

ちなみに実家が武道の教室だから武道の経験あり、そして大人より強いと評判だったのである

そういえば紫陽花は名前みたいな名字だからなんか似てる気がする
2人とも実は首席だし

なんかしらんだけど今回の1年には入試満点の首席が4人もいる化け物みたいな年なのである

そのうち2人は我がクラス
他2人は双子でA組である

まあ、そんな感じかな

クラス治めてみるからまたね！
ばいちゃ！

ミカン大福をだれか作るべき

いちご豆腐が許されるならミカン豆乳とか大福とかもあつて然るべきだてね、僕は言いたい訳ですよ、なんですよ。

それとね、世界史は確かに寝てましたよ？そりゃね？確かに俺がまずいですよ？だからつてさー…

「今時廊下にバケツ持つて立つてろは無いと思うんですよ俺は！」
うちの担任はいつの時代の方なんだ？

「廊下で大声だすなよ、うっさいな…」

ちくしょう…まさか俺が怒られる原因になつた「うぺ」にたしなめられるとは…悔しい！

「紫陽花は悔しく無いのかよ！何にもしてないのに立たされるなんて…！」

寝てたけどさ

「寝てたじゃん」

おんなじ事考えてやがる…

「でもさ、それだけじゃん？意外とまこっちゃんも酷いよな〜うんうん」

「それほどでもない」

あれ？今の声紫陽花じゃ無いな？

「紫陽花ー今謙遜した？」

「してない」

「テンション低いなーなんかあつたんスか？」

「脳細胞の復活に努めているのです」

「めっっちゃ叩かれてたしな〜」

「それに関しては俺も少し反省している。」

「まあ、まこっちゃんもこうやって謝ってんだしさ、許してやれよー？」

軽快に笑う俺

自分も殴られてるのに2人の間に立つなんてなんて良い奴なんだろうな？

これであんまりモテないのはあんまりにも不思議だと思う

……ちよつと待って欲しい。

廊下に立っていたのは、俺と紫陽花の2人だけの筈だ…

「1人増えている」！

何がおこっているのか解らない…

「あ…ありのまま今起こった話を話すぜ…お、俺は今紫陽花と2人で廊下に立って居ると思っていたら、「3人」に増えていた！何を言ってるのか分からねえと思うが俺にも分からねえ！授業終了や休み時間なんてチャチな物じゃあ断じてねえ！もつと恐ろしい世界史教師の片鱗を味わっ「長い！うるさい！お前「ら」は静かに立ってる事すら出来ねーのか！？」

こ…この教師、台詞遮りやがった…！あと2文字だったのに…

「ちよつと待って下さい先生！」

「はい！じゃあ、向日葵紫陽花君！」

「俺は静かにしてたのに「ら」って纏められるのは納得いきませんよちよつと！」

うわぁ…紫陽花が丁寧語だとかかなり気持ち悪いな…。

「確かに、一緒にしたのは悪かった。反省はしない！だがな！お前が丁寧語だめつちやキモいぞ！」

うわ、堂々とダメな台詞吐いたよこの教師！？

「酷い！？勝浦にも言われたこと無いのに！」

だろうね！

「友達に丁寧語を使う生徒なんてうちのクラスには居ないぞ！つまり言われてなくて当然！Q！E！D！」

「別にそんな力強く宣言する必要無いよね！？」

ちよつと意味解んなくなってきたよ？

それより、もう授業終了ですけれどこの教師は教室に戻らなくてよ

ろしいのかしら？貴婦人風に現実逃避ですよ

そうだ！今日はミカン大福が食べたいわぁ！ミカン大福を誰かつくるべきよねえ！

あー、このあと昼休みだし今日も学食いっくかな

乙女ティックH U M I Y A の入学試験問題作文の巻

空色のあなたへ

翠ヶ丘学園中等部3年2組

一

二三四

あなたを初めて見たのはいつの事だったのかな？

私はもう憶えてないや。

でも、初めて見たあなたもきつと、今のあなたみたいに光に溢れてたんだと思うの。

暖かくて、朗らかで、でも時折窓に向けるその眼差しは、少し寂しげで、友達やクラスメイトに見せる微笑みより優しげなあなた。

少し離れた席から見つめるだけで私の心臓が高鳴るのが分かるの。その気持ちは友達に話すのも恥ずかしくて、誰にも話した事はないんだ。

だってあなたは人気者で告白も沢山されてるらしくて手を伸ばせば届くはずなのに、とっても遠くに居る人だったから。声をかけたいな。

でも、そんな勇気が私には無いから。

空を見つめるあなたを見て、窓に写ったあなたを見る。

少し切ないんだけど、そんな日々が幸せだったの。

だけど、私は勇気が無いくせにワガママだから。

空しか見ることの出来ないあなたの表情を独り占めしたいなんてずっと思ってたんだ。だから、たまたま速く学校に着いたあの日にいきなり、あなたから、「おはようございます。今朝は気持ちの良い朝だよね？」なんて声をかけられて私はちよつと上ずった声で、

「お、おはようございます。きよっ、気持ちの良い天気です、ですね！」

なんて言っちゃって、その日1日は授業も耳に入らなくて、ずっと恥ずかしくて後悔してたの…。

だって、あなたからの返事が「うむうん！良い返事ができましたね！君って雰囲気より結構楽しい人かもね？」なんて、微笑みながら少し驚いてたんだもん。

初めての会話があれだったんだもん。落ち込んでも仕方無いよね。なんて、次の日には少し元気になったけどね？

でも、私達が話す様になれたのは、その日からだったんだよね。

あなたの登校はいつも速くて、私はあなたと話してみたくてわざわざ早起きして、いつもより30分速く学校に来るの。

話すことは他愛なくて「今日は晴れだけど暑いね」とか「もうすぐ夏休みだね」なんてことばかり。

でも、少し離れた自分の席から見つめてたときより、すごく、近く感じられるから。

あなたと会えない夏休みが終わって、友達との1月半はとても楽しかったんだけど、あなたと話せないのは見つめるだけのときよりずっと寂しかったから。

夏休みが終わって、学校の空気が少し気だるくなる9月。

それでも、後2月で始まる文化祭に皆の気持ちは移って行くの。だって、今年もきつと楽しいから。

そんな9月もおわり衣替えの10月もすぎて、待望の11月がやってくる。

準備が始まり、いよいよ文化祭に向かって学校全体が動き始める。文化祭まであと4日、そんなある日の事だったね？

いつもみたいにクラスメイト達より速く来て、いつもみたいに恒例

になったおしゃべりをして、皆が来るのを待ってた時だったよね？
あなたが突然言ったんだもん。

「あ、あの、さ。良かったら…なんだけどさ？」

あなたにしては珍しくドキドキしてたんじゃないかな？

その後の台詞だって今もちゃんと思い出せるんだ。

続きはね…

「良かったら！文化祭、一緒にまわ、回らない！？」

かみかみだったのが印象的だったな。

私は勿論断らなくて、そしたらあなたは空にしか見せない笑顔じゃ無かったけど素敵で、空色みたいな笑顔をくれたんだよね。

その日からはいつもより一緒にいる時間が増えてお互いが大切に感じ始めて…

あなたが私に向かって、空しか見られない笑顔を見せてくれるようになったよね？

あれからはずっと一緒。

何があるうと一緒だね？

病める時も、健やかなる時も、

死が2人を別つまで。

私は決めたの、空色のあなたの側に居るって。

感想欄

試験担当教諭「先生は志望理由等を想像していましたが貴女作品には度肝を抜かれました」

向日葵紫陽花「これは正しく俺へのラブレター！まだ見ぬ俺への愛の成せる所業にに違いない！君の溢れる愛情受け取（ry）」

狗神憑彦「これは作文なのかな…？奇抜過ぎるよ…」

月見里勝浦「紫陽花氏ね」

宮永教諭「本当によく受かったな…」

チキンな鳥に恋してる。

昼休憩―食堂―

「食堂…それは学生のオアシス

その事実是我が天霧学園においても例外ではない

食堂といえばお残しを許してくれなそうなオバチャンがいそうない
メージだがそんなことは無い

大日本帝国が誇る天霧学園においての食堂といえは、

「まい・エンジェル」と大多数の生徒（男女問わず）から支持をう
ける「リリア・マルクール」主任」（若干11歳、巷で人気の天
才児）その可愛らしすぎるルックスと完璧な頭脳…二三四さんがい
なかつたら俺も危なかつたな…

まあともかく、そんな可愛らしい主任が治める天霧学園高等部学生

食堂は世界に誇って良いかは微妙だが腕はまあ素晴らしいのでグー

！因みに人気メニユーは知らない」

「知らないんかい…」

「主任は幼女、管理主任はおっさん。名前は…たしか…山田美千代
？」

「それじゃ女ですよ紫陽花君」

「なら勝浦君、君はわかるか「しらん」

なんだこいつ！

「それよりさつきから紫陽花は何してんの？ご飯かっってきたら？」

sandwich頼張りながら呟く泉水きゅん

これは確かに可愛いかもわからんね！でも学力ブービーだしなあ…

「何いつてんだ泉水…あつくんは今日から断食始めたんだよ…なっ
？」

え？まじで？

「え？あさくん、そうなの？体に悪いよ？」

すいません二三四さん…初耳ですう…「違う！俺は断食などしてない！お腹は空いたぞ！？しかし好みの鶏肉系はないんだもの…チキンな鳥に恋してる俺としては由々しき事態なんだ…」カツ井は気分じゃないしなあ…

なぜだ！

「なぜだ！」

「おお！魂からの叫びだね！」

泉水よ…マイハートを読まないでくれたまえ…

「でもホントなんか買ってきたら？お弁当ないんでしょ？」

相変わらず憑彦は痛いところくぜ…

どっかのワーストとは大違いだ

さすが我が学年の成績らんくいんぐ10番台だ！

ホントどっかの320位とは大違いだな

てかうちの学校人数多いな…学費高いってのにどんだけ金持ち多いんだよちくしょう！

「実はそうなのだ、母上は作ろうとするが辞退してるのでな」

あまり迷惑かけるのもなんか辛いし

「じゃあさっさと買ってきたら？あと私のねーむ！だせばプリンオマケしてくれっからさ」

んむ？

「え？なに？くれんの？プリン？」

まじかよ…勝浦もようやく俺の有り難みがわかったのか…！？

「なにいつてんのぉ？ふつーに私が食べんだけど。めんどいから一緒に持ってきてよ」

ちつくしょう！期待した俺がバカだったよ！

「ホントにね、紫陽花はバカだよね」

だから泉水心を読むんじゃねーよ！

「まあ、お腹空きましたしなんか買ってきますっかねー」

一時間目から行われた例の

ドキッ！？男二人の水泳大会！ビート板も使うよ♪

のせいで地味に腹ペコだったりするのである

だから仕方無いけどチキンは諦めて何か買わねばなるまいて

「じゃあ行ってくるから皆待ってなさい！よいな！」

「なにさそのへんなキヤラは…まあいつてらっしゃいー」

気のない返事だなしかし…

まあ憑彦だし？

夏なのに春っていたりする謎な人物だし？仕方ないね！

まあそんなわけで一行（俺一人旅）はカウンターへ向かうのだった

生徒会公認非公式探偵部名簿・顧問以外閲覧禁止・（前書き）

今回は知人達からのアドバイスによりキャラクター説明ですが
まあ知らない人は飛ばしてくれてもかまわんですが

生徒会公認非公式探偵部名簿・顧問以外閲覧禁止・

部長

一 二三四

にのまえ ふみや

1 学年 G 組

出席番号 23 番

お誕生日：1 1 月 23 日

身長：1 5 2 c m

体重：4 1 k g

血液型：A

得意科目：歴史全般

性格調査：

基本的に控え目で温和な少女

大人しいイメージを持たれるがその実かなり子供のようにもある
しかし意外に一本芯の入った性格で正義感がつよい

いつもはよくイジられるタイプ

それにしても凄い名前だなあ…

「謎は全て解けたんだよっ！」

副部長 兼 福部長

向日葵 紫陽花

ひまわり あじさい

1 学年 G 組

出席番号 37 番

天霧学園高等部学年首席

お誕生日：8月19日

身長：176cm

体重：67kg

血液型：AB

将来の夢：決して離れる事の無い家庭

追記：

高等部学年首席にして特待生

出身校が公立中学校の珍しいタイプの生徒

――とは幼い頃からの友人

そして首席とは思えない程のバカ

とてもバカ

良く分からない自称イタズラを繰り返す

なんてメルヘンな名前なんだろうなあ

「俺は俺がだいっすきだあああああああ！……！」

部員S・

その1

月見里 勝浦

やまなし かつうら

1学年G組

出席番号39番

天霧学園高等部学年首席

お誕生日：6月4日

身長：163cm

体重：53kg

血液型：A

好きな場所：海の挑める神社

性格調査：

サツパリとした性格の活発な少女

向日葵と同様に首席だが性格の違いからか男女共に人気がある

口調は荒いがそれが彼女の常でもある

実家の武道教室で護身術として合気道と骨法を習得

向日葵、一の歯止め役になることが多い

実は意外と苦勞人

どっちでも名字みたいだよなあ

「私の名を言ってみろおっ！」

その2

泉水 泉水

いずみ せんすい

1学年G組

出席番号6番

入学試験ブービー取得者

お誕生日：10月29日

身長：164.7cm

体重：58kg

血液型：O

趣味：従兄弟との手合わせ

概要：

女顔のナイスボーイ

基本的に温厚でなんだかほんわかしている事が多い

口調は間延びしたような感じではあるが要点はわかる

小柄ではあるものの意外と筋肉質で武道をたしなむ

実家は日本芸能の家元

―― を居候させている

帝国の御三家と呼ばれる家系の内1つの近い分家筋なんだよね、そりゃ金持ちなはずだよなぁ…

「犯人は…多分きつとおそらくもしかしたら、君だ！よね？」

狗神 憑彦

いぬがみ つきひこ

1学年G組

出席番号9番

お誕生日：11月11日

身長：171cm

体重：57kg

血液型：O

好きな景色：山へと沈む夕焼け

調査結果

実家は高名な被い屋の家系

しかし狗神憑きの家系でもある

名字の由来はそこかららしい

普段は大人びた雰囲気を発する場合によっては驚くほどはしゃぐ
非公式探偵部においての貴重な常識人

一見無気力だが誰かが傷つくような場合には周りが驚愕する変わり
ぶりをみせる

確かこの子は中学校の時の転入生だったかな？多分

「狗神？知らん！そんなスタ。ドだかレギオ。だかぺ。ソナみたい
なもん出る訳が無いじゃないか！」

バカ担当

――

いちもんじ はじめ

1 学年 G 組

入学試験最下位

出席番号：7 番

お誕生日：4 月 9 日

身長：1 7 4 c m

体重：6 5 k g

血液型：O

好きな料理：炒飯

解説：

幼稚園からの特待生

普段の成績は悪いが 2 年に一度の特待テストでは基本的に余裕で合格したりする

母は知らない父は死別

それ以来は泉水泉水の家に厄介になる

特待生で学費、積立金は免除

幼稚園のなぜかある特待テストに合格

それからはずっと特待生

私が初めて行った面接は実は彼だったりする

まあなんだんと言ってもバカ。とてもバカ。物凄くバカ

「俺はただ…幸せになりたいだけなのです!!!」

顧問

雪音 紫音

ゆきね しおん

天霧学園理事長

お誕生日：12月7日

身長：ひ・み・つ♪

体重：禁則事項でっす

血液型：B

愛してる物：アルコール

部員からの印象：

お酒が好きなんだよね♪

一 二三四

世界酒飲みグランプリ優勝の教育者…いや、いくらなんでも駄目だろっ！

向日葵 紫陽花

学園のイベント時には常に呑んでる駄目な大人

月見里 勝浦

なぜPTAは訴えないのか…

狗神 憑彦

家庭訪問でアルコールを持参してきたのはもはや良い思い出だね…

泉水 泉水

名門一家出身のくせにアル中だなんて…

—
—

—— 閲覧しちゃめっ ——

麗しのまどんぬあ

ででんでんでん！金があるからなのかは知らないけど結構広い食堂
取り合えずカウンターで注文しにいかねば…

生徒数多いんだから食券機導入すれば良いのになぜか四台のカウン
ターで対応する食堂ずスタッフ

…フツーに大変そうであるな

そんなこんなで取り合えずカウンターへ

休み時間的に中途半端な時間だから他の生徒がカウンターにいたり
もせず

さくさく辿り着く

さて…今日のカウンター担当はだれだあ…

マツチヨの戸山（食堂勤務）だったら怒りますぞ

まあマツチヨの戸山（24才独り身）は料理の勉強始めたとかで最

近は厨房に居ることが多かったりする

誰得の説明なんだ…

ともかくにも

トニー！も！角煮！も！

カウンターに到着

今日の担当は…

ふむ、只の幼女のようなだ。

噂の天才美少女リリア・マルクール（11才外人）でありんす

「へろー！えぶりばでー！」↑俺

「あ、すいません。英語圏出身じゃないので」↑幼女

そんなバカな…

履歴書には合衆国出身って書いてあったのに…？

「履歴書には合衆国出身って書いてあったのに…？」

「何故紫陽花さんが私の履歴書の中身知ってるんですか！？」

「やっぱ愛だよなっ」

「意味分かりません… ドライフルーツになっただろうです？」

「…え、紫陽花だけにドライフラワー！とかじゃなくてフルーツ？

Why？なぜい？」

「さあ？私に聞かないでくださいよ…紫陽花さん今年で17歳でしょう？」

え、いやまあそうですね？

「お母さまの友達の親友の従姉妹のお嬢さんの妹の従姉妹の従姉妹心配です…」

「うん。誰だそれ」

その関係只の他人じゃない？

人類皆兄弟！でいくなら兄弟だけでも

「さあ？私に聞かないでくださいよ…紫陽花さん今年で17歳でしょう？」

「二回目だそれ！」

てゆつかさ

いつになったら本題に入れる訳エ？

「あれ？肯定してましたけど紫陽花さんって1年生だから今年16じゃないですか？」

あれ？まじで？

「あああ…そう言えばそうだったかも。どうだったかな？自信が無い」

別に触れたモノを爆弾に変えたりはできませんが

てかマチで自信が無い…

まあ年齢とか名前忘れるなんてよくあるよくある

無駄な事を考えているうちに カウンター越しに居るリリアが距離

を詰めてきていた

愛されてるなあゝ俺

やっぱりオーラでてんだな

「そうですか…」

「うん」

「本格的に心配になってきましたけど？」

「おいおい…、俺達まだ十代だずえ？細かい事気にしてたら…皺、増えちゃうぞっ？」

らあぶりい

「私まだまだピチピチの少女なんですがね？」

なんかものスゴく…なんかすごい嫌そうな顔で言ってくるね、ちみ

「甘い！人間の最大の敵は己自身！油断大敵！悪即斬！」

「あの…、精神外科紹介しましょうか？」

「ば、バカな…精神外科は大昔に廃止になった医学ですよ！？」

「知ってますよ！バカにしてるんですか！？」

ぎゃ、逆ギレえええ！？

お兄さん悲しいわあ

「まあそんなわけだから！おばちゃん！鮪の姿焼き定食頂戴！」

机に手を付き男らしくガツツリしてる料理を頼んでみたり♪

「いや、有りませんけどね？私、紫陽花さんより若いですけどね？」

「なんだってー！？それは本当なのかマル林！」

「人の名を！随分たやすく間違えてくれるじゃないですか！」「ええええええ！！？ツツコミじゃなくてボケ返し！？予想外だわ

わわ…」

「大体学食に鮪有るわけじゃないじゃないですか？しかも姿焼きとかどんだけ網でかいんですか…」

知らん！

「じゃあオーソドックスにオムライスを頂こうか！」

「了解しました、ボルシチですね？」

はい？

「ちよつ、」

「学食でボルシチ頼む人見たの紫陽花さんが初めてですよー」

「ボルシチ頼むとか今初夏なのに俺元気すぎね？」

「何いつてるんですか、紫陽花さんから元気をとったら只のニートですよ？」

「俺は高校生なんだけど！？なに？元気無くしたら俺って退学になるの？」

どんな発想だよ…ついていけねえ…

「そんなことより紫陽花さん、聞いて下さいよー」

「ニートと高校生の差って俺は結構大事だと思うんだけど…」

「とにかくですね、今日は鶏肉が無いのでチキンライスは只のケチヤップライスになっちゃいますけど大丈夫ですか？」

「え？もしかして流された？まあ別にいいけどなんで鶏肉ないん？」
そう、さつきも親子丼を頼もうとしたら

おばちゃん「ごめんねえ紫陽花ちゃん…今日は鶏肉が無いから出来ないのよー」

と言われたのだ

今までこんなことは無かった

無難に考えるなら単に発注ミス？

まあ十中八九そうだろう

しかしそれでも

誰かの陰謀の方が面白い！

詳しく聞くしかないな！

ペリメニは郷土料理ですよ！石狩鍋と同じ位郷土料理ですよ！（前書き）

なんか長いです。

分らないけどなんか長いです。

よろしければどうぞー。

やっとゴールに向かい始めましたね。

頑張ります。

主にドライフラワー紫陽花君が！

ペリメニは郷土料理ですよ！石狩鍋と同じ位郷土料理ですよ！

「さあ！鶏肉紛失について教えたまえよ少女！」

「やたら高圧的でいやなんですけど？」

「そんなっ！？Σ（）」

「そんなっ！？」

酷いよりリアたん…

「大体そう簡単には話せないですよ？一応盗難の可能性もある事件なんですからね？」

「あつ、まちで？そんな重大な事柄だったのん？」

「当たり前じゃないですか。大人の世界って情報を隠しとおした者が勝つものなんですよ？」

「まさか5近く年下に大人世界を語られるなんて…」
シヨック…

「まあそうですね…。私に向かって「愛してる」って言うてくれたら考えなくも無いですよ？」

微妙に顔を赤らめながら言うリアたん。

恥ずかしいなら言わなきゃ良いのに…

まあお安い御用だけだね！

「ЛЮБЛЮ」↑これ俺だよ

「まさかの私の母国語ですか！？」

「りゅぶりゅー」

「なんか平仮名にしたみたいな発音ですね！」
見抜くなよりリアたん…

因みに

「ЛЮБЛЮ」

「りゅぶりゅー」

は

ロシア語

で

動「愛してる」

だぜ「これで文句ないでせう!？」

「審判によつてはボール取られるコースでしたけどね？」

「えー…」

「大体ホントに何故私の母国知ってるんです…？」

「調べたのさ！探偵使つてね」

「そうでしたか！」

バツと笑顔になる彼女。

この笑顔をみたら信仰レベルの人気があるのも納得かもすれない。

「紫陽花さん」

「なんだいリリア」

「次ぎ会う時は法廷ですね…！」

やつちまつたああああ！！

「いやまあ嘘なんだけどね？」

「知ってますが？良いから理由言ってくれないと教えませんからね
！」

なんか立場が変わった気がする…

「まあ…あれだ。ホントの事ゆーとだね…」

「いいから早く言つて下さいよ。紫陽花さんには考える頭も無いで
しょう？」

「ひどいつ!？」

「ハリー！ハリー！」

「えつとあの…学園長先生が教えてくれたし、髪の毛は銀だし目が
蒼つてか翠がかつてるから…」

「その洞察力他に活かしたらどうですか？」ため息をつくりリア
関係無いけど可愛いかもわからんね

「まあ俺の知識量の勝ちかな」さあ教えなさい！」

「まあ約束ですからね…。教えますよ！」

ふんっ！と鼻をならすりリア

正直可愛くてたまらない

大人びているようであどけない少女の面影を残し、愛らしい行動も良く似合う

やはり天性の美少女というのはどの仕草をとっても可愛くて仕方無いモノなのかも知れない

銀色の髪の毛、碧い瞳

そして整った顔立ち

人気があるのも頷けるとも

因みにこないだ

「一部の生徒が激しくアプローチかけてきてめんどくさい」からしばらく一緒に居て欲しいと頼まれた

役得！ラッキーだったね俺！

そして次の日の俺の下駄箱は見事に不幸の手紙と棒の手紙と良く分からない呪術的な物体で一杯だった…

まあそんなことは理事長室（もはや酒屋。仕事場には全く見えません。）に置いて

取り合えず話を聞きたいのである

まあそんな感じになってたら話を始める彼女

「おいそれと生徒にいつてはいけない内容」というのは本当らしく顔を近づけてくる

「じゃあ話しますけど…。まずですね、紛失した「鶏肉」っていうのはある島の特産で帝国一の烙印を押された事もある一級品なんですよ。まあだからといっても流石に鶏肉泥棒という線はまず有り得ないので内部の犯行の線が高いんですよ。だからあまり表沙汰にできないから生徒には話すことは控えるしか無いんですけど…」

ふむふむ

最後のはスルーしてもつまり

「外部」からではなく「内部」からの犯行

これだけで大分分かる気がしますな

そして、内部の人間でそんなことをするのは

「まあつまり内部の人間が故意に行った故の紛失なら候補は二種類に分けられますよね？まず一に、「鶏肉が無くなる事で生まれる利益が目的の人間」まあ利益があるかはわかりませんが。もう一つは「鶏肉が無くなる事で誰かを陥れる事が目的の人間」これはつまり「主任」である私、「食堂管理主任」の山田さん、後は「筆頭料理人」の暁ノ守様、もう様をつけるしかないあの人のフルネームは感服に値しますよね。ともかくこの三人に何かしら恨みのある人物の可能性が高いでしょうね」

予想通りでありんす

そして食堂管理主任の名前はやっぱり「山田」だった、もしかしたらマジで「山田美千代」なのかもしれない…

そしてやっぱり「勢鞍暁ノ守」とは良く覚えてない」には様をつけるしかないというのは共通認識だったみたいだ

「ふむ。まあ大体予想通りだったかね。そんでリアに心当たりは？」「こんだけ若くてその上有能だってんなら恨みなんて砂の数ほどされているだろう

「私は正直心当たりなんてありませんけど…。ただ今日の仕込みが「暁ノ守様」ということを知っていたとしたらもしかしたら暁ノ守様が目当てだったのかも知れないですよ？もしくは監督責任にさせるためだったら「私ことリアマルクル」、「山田美千代管理主任」が目的だというのが理由かもですね」

「やっぱり美千代だった！間違って無かった！」

やっぱり俺が正しかったのだ

勝浦は知らなかったんだろうからやはり俺の知識量の勝ちだったな。うん

「？なんのお話ですか？」

「まあ気にするなよ主任」

「別に構いませんけど…」

まあいきなり

やっぱり美千代だった！

とか言われたらビックリしますよねそりゃー

「ともかくですね、今回の鶏肉紛失っていうのはPTAとか下手したらマスコミが面白可笑しく脚色しての大問題になりかねないんです。お金持ちは怖いんです」

「正直イタズラしたときの周りの反応からも金持ちは怖いんだって分かり始めました…」

「でしょう？とにかく本日中に犯人を見付けない事には最悪の場合さつきあげた三人全員の首が飛ぶんですよ。まあ私はここを辞めても大学の講師とかいくらでも就職先ありますけどねー」

「重い話に見せかけて然り気無く有能アピールしやがった！ー！」
恐ろしい１１歳だなおい！

「でもここには愛着も有りますし、昼休みが終わったら食堂関係者を集めての会議も行いますから見付かるとは思っんですけど…」

「ですけど？」

「見つからなかった場合は周りに事件がバレないうちに鶏肉が無い理由をでっちあげます！」

「わおそうきたか！てかあれなの？そこまで鶏肉云々が大変なのって食堂の売り文句が何故か「世界中の鶏肉料理から最高のモノを選び生徒達に素晴らしき鶏肉世界を提供します。」とか言うバカ丸出しなアレだから？」

書いた奴ただけ鶏肉大好きなんだよ…

大体「鶏肉世界」ってなんだよ

なんで外海からの留学生の為に世界中の料理の方をオススメしないんだよ…

なんだって世界中の鶏肉料理になるんだ…

「良く知ってましたね？やっぱり中身がアレでも首席の称号は伊達じゃないと…」

あらまっ、みたいな感じで驚くりりア

その仕草は可愛いけどいくらなんでも酷いんじゃないかな…

中身がアレって…

「それはスルーしてもやっぱりの変な売り文句があるからこそ批判を受ける、と？」

「その通りですよ。せめて「生徒のリーズナブルに合わせた世界中の料理を提供します。」だったら良かったんですけどね…。ともかく保護者や学園関係者の方々の中には食堂を仕切っている内の二人がまだ若いから、っていう理由で毛嫌いしてる人もいますからね。そんな人達にバレたら一大事です。だから一見クールに見える私も内心は不安と焦りでいっぱいなのですよ…」

ふむ…

長い台詞って疲れない？

まあ聞かないってか聞けない雰囲気ですがとにかく事情は分かったから次は「動機」と「アリバイ」を調べれば犯人に辿り着く気がするよ母さん！

「まあまあ総て俺に任せなさい！興味が沸いたからその事件、俺が解決してみせるともよ！」

そして一回間をあけて、かつこよく決めます！

「君の不安も焦りも、俺が取り除いて見せるさ…！」

「ふむ、6点ですかね？」

「ええええええええ！？高いのか低いのか微妙な点数だなおい！」

「勘違いしてませんか？10点満点じゃなくて100点満点ですよ？」

「ひーくーいー！」

「とにかくですね、協力して頂けるのはまあ、その、嬉しい…ですけど、極力内密にお願いします。後は危険な事だけは絶対しないでくださいね？」

「りょーかいりょーかい」

「ホントですね？約束ですからね！」

「大丈夫だつてー。任せときなさい！」

「……分かりました。それじゃ頼まれた「ペニメリ」も出来上がり
ましたし、サクサク食べちゃって下さいね」

……？

「……！ペ、ペニメリ！？なんだそれ！どんな料理かも分からんし俺
が頼んだのはポルシチだぞ！？なんだペニメリって！？」

「なにいつてるんですか」。紫陽花さんが頼んだのはオムライスで
すよ？ペニメリは私の紫陽花さんへの気持ちを表すために作って
もらいました♪」

「あ、まじで？どんな料理なの？」

「そうですね、所謂餃子スープですね。」

「はい！？」

「つまり「皮に包みたい関係」です♪」

「マチかよ！」

「ええ♪」

「てかペニメリって何処の料理だよ！聞いたことないよ！」

「失礼な！ロシア区域の料理です！ペニメリは郷土料理ですよ！石
狩鍋と同じ位郷土料理ですよ！」

「わ、分かりました……」

「分かったらサクサク行つて下さい！昼休みも残り少ないですから
ね！」

まあその通りだからおれは何も言わずにペニメリをもってテーブル
に向かったのだ……

ご飯にする？ライスにする？それともお・こ・め？（前書き）

なんか微妙かもです

テンションは大切ですな

「ご飯にする？ライスにする？それともお・こ・め？

「カウンターで鶏肉紛失について詳しい話を聞いた後、俺は半ば無理矢理に買わされたペリメニを持ってテーブルに着いた。」

「んー？鶏肉？紛失？あいちゃん遂にイカれた…？」

「勝浦よ、お前は誰に話しかけたんだ？俺か？その「あいちゃん」つてのは「あじさい」からとったのか？無茶だよ…！」

個人的には「あさくん」はアリです！可愛いから！でも客観的には無茶ですよ！

「硬いこと言っなよあいちゃん。で？話を続けても構わんよ？ん？」

「お言葉に甘えて…。だが、」

「あつ、マチで続きからなんだ！一君ビックリ！」

「シャラップ！」

「はい残念！一君は英語が分からなかった！」

「お黙りっ！」

俺は右手を繰り出した！

紫陽花のビンタ！

一に253のダメージを与えた！

「すいませんでした…」

「だが、重大なミスに気が付いたのだ！」

「ミス？意外と珍しいんじゃない？ひー君がミスるなんてそうだろうさうだろう

俺は地味に高性能だからな

台詞を言った憑彦はおやおや、みたいな顔

両隣のバカ共はぼかーん

向かいの二三四さんは相も変わらず可愛かった！

勝浦は知ってますが何か？みたいな表情だった

こいつら俺が入試で満点叩き出して首席になったの忘れてないか？まあ、良しとしよう

「で？ひー君よ、そのミスってなに？」

「良くぞ聞いてくれたな憑彦！実はだ、ペリメニを渡されて直ぐ来ちゃったから忘れてたけどさ…」

「サクサク話したまえよひー君！」

「うん、米が無い！パンもだ！」

「断食中だし丁度いんじゃない？」

「しゃいん！」

紫陽花は右ストレートを放った！

「ふぼっ！？」

バカな一に鉄槌を！

「主食だ！主食が無いんだよ！」

主食は大事です

おかずがあればいいやー

って人は分かかってないね！

米を食え！ライス食え！

牛乳を飲め！牛乳をぉ！

「なら買つて来たら良いんじゃないかなあ？」

二三四さん、貴女は天使だ！

「時間的にきびすい…」

「そうだよね…。あつ、じゃあ私のさんどいつち食べる？」

かわういいいい！！

母さん産んでくれてありがとう

父さん出してくれてありがとう

俺よ産まれてくれてありがとう！

「ふっ…大丈夫さ…！俺は勝浦のおむすび食べるからさ」

八二カミ紫陽花！

「勝手に決めんなし」

取り合えず喋ってる内にペリメ二完食…

後で理事長室いつて何かたべよ

あの人は職務怠慢どころか授業前の生徒（俺と泉水と一）にモノポリーしようぜ！

って言うてくる猛者だからな

取り合えず完食したから鶏肉搜索に移るのも有りか…

おむすび食べたいな

勝浦のトレーに手を伸ばす

「あいちゃんめっ！」

「あうっ！手を叩かないでよママン…」

「何さこの完成度の低い寸劇…」

「憑彦さんよ…漢ならもつとノリ良く行こうぜ！」

「私女の身故」

くだらない事してる暇は無かった！

「諸君心して聞きたまえ！これより食堂で起こった鶏肉紛失事件の調査をするぜい！」↑俺

「めんどいなあ」↑つつきー

「やったるぜ！暇だし！」↑バカ

「あ、僕も？」↑泉水

「放課後とか休み時間ならいいよー」↑二三四さんマヂ漢数字
ほぼ決まりだな！

「勝浦はどうする？」

「ん？ああ…別にいいよー。まあ取り合えず内容をだね」

「まかせろ！あれは今から…」

「昔話はいらないよ」

つめたあい

「紫陽花説明中」

「まあそんなわけで今から早速始めます！」
んっ！

キメる！

「非公式探偵部！活動開始じゃああい！！」

「「よっしゃあああ！！」」

バカ2人はやはり元気が良いな！

「へいへい、おー」

つつきーヤル気出せよ！

「おー！頑張ろうね！」

愛してる！二三四さん愛してる！

「うよーーし！」

長いね勝浦ちゃん！

「うし！早速調査開始じゃああい！」

「そこの紫陽花さんうるさいですよー！」

「あ、はい」

とりかかりますかね！

酒！吞まずにはいられない！（職務中です）（前書き）

今回は短めです

酒！吞まずにはいられない！（職務中です）

怒られたからテンション下げて…

「まあそんな訳で行動開始な訳ですが…」

「ですが？早く言えよあいちゃん」

うるさい子だね全く…

「6人で行動するのは要領も効率も悪いから2人ずつの3チームに別けるんだぜ！よいな！」

「どんな風に別けるんだぜ？」

つつき…その語尾はなんなんだぜ？

「まあそつだな…だぜ」

「早く言えよあいちゃんだぜ」

「決めた。発表するんだぜ」

ドォルルルン！

ジャン！

「まず一組目！憑彦と二三四さんだ！だぜ！」

「ん？ミーか…よろしく二三ちゃん」

「うんー。よろしくつきちゃん」

真面目な二三四さんをやる気の無い憑彦に付けることでこちらの自由度をアップリケ！

我ながら素晴らしい…

「二組目！勝浦と一だ！だZ E！」

「うげ…勝浦か…殴らないでくれよな？」

「それはキミ次第なんだぜ。まあ適当にやるんだぜ」

比較的常識のある勝浦と比較的常識のない一を合わせることで俺に対する注意力を散漫させ、なおかつ更に自由度がアップルパイだ！

「んじゃ最後は俺と泉水な」

「よーし！頑張るかなー！」

「その意気や良し！」

元気が一番だよな！

「じゃあ紫陽花！早速行こうか！」

「良し！行くぜ！皆の衆！後は自由行動！情報掴んだらTELしなさい！以上！」

「解散！」

「早速ごは…聞き込みだ泉水！理事長室もとい酒蔵に！」

「りようかーい！ごーごー！」

酒蔵でご飯食べるんだぜ！

どうせ理事長はいつも通り

《酒！吞まずにはいられない！》とか言ってるはず
職務中です！

食器を片して俺と泉水は廊下へ走るのであった…

「ああ、バカ2人が行ってしまわれた…」

「憑きちゃん！昼休みも残り少ないし私たちもごーだよ！」
元気だねえ…

砂糖3つあげよう

「へいへい。じゃあ無難にマッチョの戸山にでも話聞きに行こうか？」

「うん！やる気出てきたよー！」

ああホントもう可愛いなあこの娘
地味に抜けてるけどね！

「じゃ、行きますかー」

伸びをして気持ち切り替え

終わったらおうどんでもおごらせようかねー

「おいおい！俺達も行くぞぜ？」

「やだよめんどくさい！」

なんなのこの娘…

「久々の部活動だし気合いいれてこーぜ？」

「全く…仕方無いなあバカじめ君は…」

え…なにそのアダ名新しい…

「無理ないか？流石に…」

「いいから行くんでしょ？どこいく？」

「ああ、取り合えず山田んどこ行くかー。知ってそうだし！」

「へいへい。行きますかー！勝浦無双だぜ！」

「新しい！何を薙ぎ倒して行くのかわからない！そこに痺れる憧れるうー！」

「さあ！出発だ！」

おしおしおし！

「いくつかー！」

で、管理主任ってどこに居るわけ？

酒！吞まずにはいられない！

別に父親はクズでも酒呑みでも無かったし同じことをしている（してない！）そんな自分にあ、荒れたりなんかしてあげないんだからっ！

酒！吞まずにはいられない！（職務中です）（後書き）

次回からは2人一組で進めていくのでキャラ数による把握難は抑えられるかと思えます

かくてカクテルかくてるテル

「A組の山崎をいつか倒したいんだけど…」

食堂から退散し、取り合えず理事長室を目指して泉水と廊下を歩いてたらいきなり危ない事を言われた

A組の山崎とは顔も、頭脳も、家柄もそこそこののに茶道部のエースをしているマスコミが大好きな努力の男なのだ
下の名前は知らないけど

金持ちばかりなこの学園の特待生で、学力じゃなくて茶道の腕を買われた少し特殊なタイプなのだ

ところで茶道部のエースって何するんだろうか…

あれか？お茶をたてる速度が155kmの超高校生級とか？

怖いよ！

持ち球はチェンジアップとカーブです！

フォークも有りじゃないかい！？

「そうだな、アイツは泉水を差し置いて茶道部のエースだもんな」

「そうなんだよ。こう見えて腕には自信あるのに…」

「そうか…そしたら後はもうアレしか無いかもな…」

出来れば使いたく無かったが…

「だよね、僕からも提案しようと思ってたんだ」

「じゃあ同時にな？」

「りょーかい！」

「うし、じゃあせーのっ！」

「「闇討ち!!」」

ろくでもねえ!

ろくでもねえなこいつの頭!

「ちよつ、お前どんだけ危ない思考回路してんの!?!」

「なつ、紫陽花だって同じ事言っただじゃないか!」

「そ、それでもお前よりはましだよ!ほら、俺のは優しさが半分入ってんだよ!」

「なにをう!?!なら僕のが紫陽花よりましだよ!僕の闇討ちは半分以上が優しさだからね!」

いやいやいや!闇討ちとか恐ろし過ぎだろ!

そんなの失礼しちゃうぜ!

「いや、どっちもどっちじゃないかしら…。それより流石に理事長室の前で生徒を襲う算段つけるのはやめない?」

むっ!?

いつのまに…

いつのまにか理事長室の前まで来ていたらしい

そして話も聞かれていたらしい

「むっ!でたな妖怪酒呑童子!!」↑泉水

「待て、それはなんだかカッコいいぞ!言うならあれだ、出たな妖怪酒呑み理事長!PTAに怒られちまえ!」↑俺

「なんて酷い教え子達なんだ!理事長に対する愛とか無いの!?!」

↑妖怪酒呑み理事長

「「愛など要らぬ!」」↑生徒

「それ言うべきは私じゃあないかな!?!」↑不良教育者

なにいつてんのこの人…

「いいから理事長室でご飯食べさせなさい！」

「緑茶お願いします！」

「し、しかたないなあ…モノポリーしようぜ！」

「地味に私、紫陽花からお話もあります」

「うむ、生徒の相談は理事長として受け止めよう！モノポリーしてからね！」

「何時間居させる気だ！？留年させる気が貴様！」

な、なんて恐ろしいんだ！

「いいからモノポリーしようぜ！泉水君は理事長室でお茶入れてなさい！」

「了解だよ！」

泉水は理事長室に消えていった…

うむ？お話なら別に鶏肉云々だからいても問題ないのに…

「で？お話ってなにかな？」

「なんか食堂で鶏肉無くなったらしいじゃん？我が非公式探偵部としては面白い事件には参加したいのだよ」

「それで理事長室に？」

「うむ。だから泉水を先に入らせる必要無かったんだぜ？知ってるから」

「なんだー、また1月泊めてくれとかかと」

「ねーよ。別に家無き子とかじゃないんだし」

「やれやれ…まあ食堂の事件なら中にて聞こうかな？」

なんかわからんけど溜め息ついて中に入る理事長

確かに泊めてって頼んだ事も有るけどアレは小学生の時だよ
今更何言ってんだろあの人

まあお腹も空いてるし話もあるから俺も中に入るのだった

理事長室の中には酒が沢山である

教育者の仕事場じゃねえだろ…

かくてカクテルかくてるテル

日本酒は机の上に常備らしい

知ってたか？酒って呑まなきゃ減らないんだぜ？（前書き）

アレです

ネタが出ないんです

おつむがボイコットでストライキです

パンツはストライプが良いですね

知ってたか？酒って呑まなきゃ減らないんだぜ？

理事長先生のお部屋

つまり理事長室！

応接用のソファー

テーブル

実務用の机と高そうな椅子

これだけなら所謂普通の理事長

しかし天下の秀才学校を舐めたらいけないのだよ！

学年ランキング最下位でさえ公立なら上の方だからな！

信じがたいが！

とにかくこの理事長室には私用のアルコール類が大量にあるのだ

しかも！

実務用の高そうな椅子の下には階段がありワインセラーに繋がっているという魔王の城みたいなものである

正直自宅に作って欲しいんだぜ…

「それで？鶏肉の話だっけ？」

「おう。その前に飯な」

「君って私の旦那様だっけ？お風呂いる？」

「いや、俺には愛する人が…」

「そっか…そうだよね…私なんて世界一アルコールに強い事しか取り柄無いもんね…」

「それを取り柄と言うのはどうかと…とにかく紫陽花君は腹ペコだ！泉水！サンドイッチとかないわけえ！？」

「恥知らずなお花が居たああ！」

なんて酷いことを言うのだ奴は…！

「いいからなんかご飯持つてこい！黄金の鉄の塊で殴んぞ！」

「あつ、先生の机の上に麒麟の瓶があるからとつて」

「あれ？理事長つて職務中に飲酒しても良いの？」

「良いわけあるかばけい！！」

「悪い訳あるかばけい！！」

「あたいもういや！でも泣かない…だつて、紫陽花だもん！」

「取り合えず戸棚からお弁当発見したから食べなよ」

「あれ？それ私のじゃない？私お弁当抜きなの？」

「頂こう！理事長は後で食堂でなんかお食べ！」

「それも良いかもねえ」。ただ私が行くとリリアちゃん毎回ボルシチしか作ってくれない…ていうか最近君達のせいで怒られるからお酒の減りが早くてね…はあ…」

「知つてたか？酒つて呑まなきゃ減らないんだぜ？」

あのこどんだけ母国好きなの？

理事長どんだけお酒好きなの？

まあお弁当手に入れたし？

食べながら調査だ！

幸いな事に時間なら後二時間あるんだ

授業？まあ緊急事態だし良くね？

鶏肉について本気だして考えて（前書き）

ほぼ一年ぶりですね

読んで下さっていた方がいらっしやったら本当にすみませんでした

ネタが出ないんです…

漁ってくるしかないのか…

ネタだけに

鶏肉について本気だして考えて

13:15 - 理事長室 -

かくて我々は理事長室に潜入し、なおかつ理事長のお弁当を入手することに成功したのだった…

しかしこのお弁当、気になることがある

ハンバーグがあり得ない位赤いのだ、その上ソースの色も何故か瓶に入った赤紫色の飲料を彷彿とさせる色をしている

もしかしなくてもこいつぁ…

「ちよつと紫音ちゃん」

「なにかしら紫陽花ちゃん？」

「なんでハンバーグから赤ワインの豊潤な香りがするんだこのアルコール依存性め！」

どうやったらハンバーグから肉の香りじゃなくて酒の香りしかしなくなるんだ！

なんでハンバーグから肉汁じゃなくて赤ワインがしみでてるんだ！
！こんなの絶対おかしいよ！

「いやいや、僕は洋食詳しくないけど確かフランベって調理法だとワインを使うんじゃないか？」

「そうだね、その通りだよ泉水君。ただね、フランベは肉の臭みを消すために行うんであって酒の香りをつける為だけのファイヤーじやあないんだよ！」

何歩譲ってもこれはフランベしてないよ！ワイン煮込みハンバーグ

だよ！

それどころか確実にアルコール抜けて無いよ！

大体お弁当に入れんならソースは小さい入れ物に容れとけ！直接かけとくなよ！混ざるから！

「とにかく未成年の俺が！と言うか人類が食えるもんじゃねーぞこれは！弁当箱自体に酒の匂いついてんじゃねーかよ！」

「えー。おいしいよお？このハンバーグ。食材だって高級品だし！」
「その食材をいかしたいなら酒ぶっかけんじゃねえよ！」

もういやよあたい！

「取り敢えず紫陽花が食べれないなら理事長に返したら？人類最強の肝臓持つてる理事長にさ」

「大体お弁当を奪いに来たんじゃないやなくて鶏肉について本気だして考えてみにきたんでしょ？」

その通りである

ただ、鶏肉にかんしては
無くなった量

犯人の目星、犯行理由
可能な人物

この辺りがしつかり確認出来ていないし何より、主任はともかくとしてもこの学園じゃあ毎日ローテーションで冷蔵庫の管理をしているらしいから鶏肉が仮に盗まれた、捨てられたとしても偶々今日だったのかそれとも狙って今日にしたのか

それが問題だろう

ローテーションってことは責任者が日替わりなのだから
主任ともなればまた別なのかも知れないけどもな

「まあなんにせよ理事長先生様に知っている事を洗いざらい聞いて、また他の人にも聞いて情報を集めつつ纏めるべきだろうな」

「実際僕らが知ってるのはマルクールちゃんに聞いたのが全部だもんね。ただどちらかと言ったら無能よりの僕らの理事長がどこまで情報を与えられてるかが問題になるのかな？」

本人の目の前で無能よりとかゆーなよ

当の本人凄い寂しい目してんぞ

大体、最高責任者が何にも聞かされて無かったらその組織もうダメなんじゃないかな…

「あんまり優秀じゃないけどそんな事言うなよ。理事長だって頑張っただよ！」

「一応私って頭良いし仕事もできるんだけどなあ」

寂しげな瞳で呟く理事長

この人には圧倒的に威厳が足りない

この人だってまぎれもなく天才養成所なんて言われる多くの教育施設を束ねる一族の直系なのだが

本人にはあまり自覚が無いし、何より教育者の才能が感じられない…俺も何度かお目にかかった理事長のお婆様はそれはそれは素晴らしい威厳と威圧感とカリスマを放っていたのに…

因みに、だけど帝国に数多く存在する「雪音私立」とついた学校を管理する人達を纏めて

「雪音グループ」の誰々

って感じに呼ぶのだ

雪音グループの会長

って言われたらそれが我らが理事長のお婆様である

それはさておき理事長の言う通り本人自体のポテンシャルは悪くないのだ、がしかし
いかにせん自由すぎる

だから泉水みたいな不良生徒に馬鹿にされるんだ！

「今さ、僕と理事長両方に失礼な事考えてなかった？」

「うんうん、何て言うか私を残念な目で見たあと泉水君と私を鼻で笑ったよね？」

意外と鋭いじゃないの…！

誤魔化そう

「そんなこと無いし。俺は二人に敬意を払ってるからそんな事しないし。ね？信用してよ」

「いや無理だけど…無理無理有り得ない」

なんだと…こいつら…

「ええい閑話休題！」

「泉水はお茶を煎れてきなさい！理事長は知ってることを洗いざらい話せ！素直に話したら出前呼んでやる！学園にツケで」

俺のせいではないと思うが会話が一向に進まない…

無理矢理にでも進めなければ意味が無い…

リアの情報に誤りがあるとは思わないけど正直何が何やらって感じだからな

だがしかし理事長は腐っても、もとい発酵しても教育者でありこの学園の最高責任者だからこちらの思い通りに知ってることを話してくれるのか…それが最大の謂わば問題だ

リアもいったけどあくまで俺達は「一般生徒」なのだ

責任も権利も何も無い

いってみれば興味本意で現状最も重要な事柄に首を突っ込もうとしている

誰かに話すかも知れないし、そうじゃなくても邪魔なだけになる可能性だって存分にある

学園のお偉いさん方（スポンサーとかお金持ちな親御さんとかも含める）にとっては俺達が動くのは迷惑

理事長にしたってこれ以上めんどくさくなるのは嫌で何も教えてくれないかも知れない

それは充分に分かっているのだが…
それでも…

興味が！

尽きるまで！

出歯亀をやめない！

仕方無い、仕方無いのだ

だって気になるもん

そんな感じに一人で考えて一人で納得した俺に理事長が話しかけてきた

いつもの気の抜けたポヨポヨしたソレではなく、とても真剣な面持ちで理事長は語りかけてきたのだ

「泉水君、

私の飲み物は20種類以上の果物によって生まれた奇跡のフルーテ
イードリンクで頼むよ。赤いパッケージのね」

え？そこ？

タイミング的に俺に話しかけてよ…

お願いだからさ…

なんか理事長にカリスマ感じたのに今ので消し飛んだよ…

「了解！。紫陽花は僕と一緒にの冷えた麦のドリンクで良いよね？」

「良いけども、それがアルコール飲料では無い事を祈ってるよ…」

カムバック！緊張感！

蘇れ！理事長のカリスマ！

「それで、なんだけどさ」

唐突に話し出す理事長

カムバックは突然に…

お帰り、緊張感！

「私に聞きたい事って食堂のアレでしょ？」

そうではあるのだがなんか上がり下がりが激しくて思考が地味についていけない

これはまずい傾向だぞ…！

主導権を握るのはあくまでも俺でなくては！

とりあえずここは素直にはいと言っべきかな

「ふっ…。貴様の理解力はその程度か…。我輩がこの完璧な頭脳によつて既に解決した事柄を何故、貴様に訪ねる？もう少し頭を働かせるべきではないのかね？」と、紫陽花が申しておりますぜ！」

え？

なんでシリアスに入りかけた途端に泉水君って俺の邪魔するの？

ふざけやがって…！

俺の努力を何故そこまで無に出来るのだ！

ムニエルに出来るのだ！

「え…？あつ、もしかして違った？他に聞きたい事あったの？」

え…？なんで信じるの？俺の話し方じゃなかったじゃない

一人称に「我輩」とか使ったことないし

もうそろそろ心が…折れそう…

鶏肉について本気だして考えて（後書き）

できる限り更新を頑張るのでよろしければ、これからもお付き合い
下さい

ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5958j/>

犬と名探偵が食堂はラブソディー

2011年11月15日06時04分発行